

ミステリ読書案内

2023. 9. 9 発行元

第512号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

鮎川哲也「ベスト表」(再掲)

私が日本のミステリ・ベスト1に推す『黒いトランク』の作者・鮎川哲也の『ベスト表』を再度取り上げてみることにしよう。鬼貫警部、アリバイ崩し、密室もの…「本格ミステリ」の宝庫とも言うべき作品群。

「鬼貫警部シリーズ」など

この私の『ミステリ読書案内』でも鮎川哲也は何度も取り上げている。『鮎川哲也の代表作』の号では『黒いトランク』『リラ荘殺人事件』『ペトロフ事件』の三作を紹介した。今回は『憎悪の化石』と『戌神はなにを見たか』を取り上げてみることにした。鮎川作品ならば、どの長編を取り上げても「お薦め」の内容を

書けるような気がする。

右の『ベスト表』は以前掲載したものと同じである。作品数はそう多くないので、ほぼこれで全ての作品が網羅されていることになる。調べていないが、現在手に入りにくい本はあると思う。ネットを使えばそう難しくはないのかもしれないが…。

短編にキラリと光るトリックが使われているものがあるので、余裕がある人は是非読んでほしい。

「憎悪の化石」

1956年講談社。日本探偵作家クラブ賞受賞作品。冒頭の「劇場の死」の章では、結婚間近の友達を含む女性五人組が登場。観劇の途中で一人が屋上から転落死する場面が描かれる。次の章では熱海の温泉宿に場面転換になり、大阪からやってきた湯田真壁という人物が出てくる。逗留の最初の日だけは東京に出掛けたが次の日からは部屋に籠りっきり。四日目に離れになっている部屋でナイフで刺されて死亡しているのが発見される。調べてみると湯田は大阪の探偵なのだが、どうやら恐喝のネタを集め、数多くの強請を行っていたらしいことが判明してくる。熱海署では容疑者を12人に絞るのだが、いずれもアリバイが成立して捜査は行き詰まり状態になる。とうとうアリバイ崩しの専門家とも言うべき鬼貫警部に出番をお願いすることになり、新たな展開になっていく。鮎川ミステリの特徴である緻密な組み立てとトリックで読者を楽しませてくれる。

「戌神はなにを見たか」

1976年講談社「推理小説特別書下ろし」シリーズの一卷として出た本。後期の代表作。この本は四六版よりひと回り小さい版で箱入りになっている。

東京の稲城市にある櫟(くぬぎ)林で中年男の死体が発見された。それはカメラマンをしている小日向大輔という人物で、背中に刺し傷があり、どうやら車で運ばれてきてこの場所に遺棄されたものらしいとわかってくる。近くには外国人の顔が彫られた金属製のレリーフが落ちていた。また、死者の胃の中には瓦煎餅が未消化のまま入っていることがわかった。捜査陣の必死の努力によって同業の坂下護という人物が容疑者として浮かび上がるのだが、坂下には鉄壁のアリバイがあったのだ。その日、推理専門誌の依頼により、江戸川乱歩生誕の地、三重県名張市にいたと主張するのであった。このアリバイ崩しに挑むのは…。なお、推理専門誌の関連で戦前、戦争直後に活躍した作家たち、大阪圭吉、大庭武年、西尾正、橋本五郎…などの名前が登場するのも興味深い。

《鮎川哲也作品のベスト表》

1. 黒いトランク
2. リラ荘殺人事件
3. 鍵孔のない扉
4. 憎悪の化石
5. 人それを情死と呼ぶ
6. 死のある風景
7. 黒い白鳥
8. 砂の城
9. 死者を苔打て
10. 偽りの墳墓
11. ペトロフ事件
12. 戌神はなにを見たか
13. 赤い密室 (短)
14. 宛先不明
15. 朱の絶筆
16. 風の証言
17. 新赤毛連盟 (短)
18. 準急ながら
19. 黒い版画 (短)
20. 死びとの座
21. 写楽が見ていた (短)
22. 青い密室 (短)
23. 積木の塔
24. 五つの時計 (短)
25. プラスチックの塔 (短)
26. 翳ある墓碑
27. 沈黙の函
28. 太鼓叩きはなぜ笑う (短)
29. 王
30. サムソンの犯罪 (短)
31. 楡の木荘の殺人 (短)
32. 誰の死体か (短)
33. 青いエチュード (短)
34. ブロンズの使者 (短)
35. 材木座の殺人 (短)
36. 貨客船殺人事件 (短)
37. クイーンの色紙 (短)
38. 西南西に進路を取れ (短)
39. ヴィーナスの心臓 (短)

短編集に関しては、各出版社によってさまざまな組み合わせで出されている場合があり、ここに挙げたものはひとつの例として見てもらえれば良い。私の表の元になっているのは1979年から刊行された立風書房版の『鮎川哲也短編推理小説選集』。通常の文庫本よりは一巻に収録されている作品の数は多いと思われる。